

研究課題	中世近世諸経疏の総合的調査研究
研究代表者	濱田 智 宏 (仏教研究科博士後期課程仏教学専攻)

### ① 研究の目的

仏教の思想を探る際、諸々の経疏類を読解することは重要なことであり、中でも特に中世近世以降の末疏類には鋭い観点による解釈、緻密な校訂が多く見受けられる。

しかし、それらの経疏の中には、十分に研究されていないものや、未だに研究の対象とされていないもの、未見のものが多々存在している。

天台宗が仏教の総合的領域を担い、日本文化に及ぼした影響は甚大なものがある。それに見習い、机上から離れて各時代の先学の足跡を叡山文庫に尋ねることにより、研究の視野を広めたい。

### ② 研究の経過

7月上旬より叡山文庫調査の交渉を叡山事務局と行った。昨年の実績もあったため、叡山事務局・叡山文庫の方々と、改めて調査の目的及び内容の確認、撮影データの権利、持ち出す資料媒体 (DVD-R か印刷したものか)、撮影場所、禁止事項について書面で確認を取り合った。また谷中天王寺福田蔵において、実際に蔵書をお借りして資料撮影をさせて頂き、閲覧の仕方、撮影方法、調査カードの取り方などの文献調査の事前実習を行った。

その後8月7日に、調査許可願に各自の研究内容、本調査の目的、日程、閲覧書物、撮影書物名及び一冊ごとの撮影・複写許可願を叡山文庫に申請し、一山会議での承認の後、調査の許可を賜った。

調査実施日には、著作権や所有権についての明文化した書面に、叡山文庫の責任者より記名及び捺印を頂き、大正大学研究支援室に提出した。

書物の読解と研究撮影した書物は、一枚ごとに傾きや色合いを修正の上、印刷し、その内容の判読・検討を行った。事項より研究代表者及び研究分担者の研究内容、本調査における目的と、その成果について記述する。

### ③ 研究の成果

#### (1) 研究内容

中国仏教における慈悲と縁起の思想について研究をしている。その思想についてこれまで天台の著述である天台三大部を中心に考察を進めてきた。本調査では特に『法華玄義』の中に説かれる上記の思想が、中近世においていかに受容され解釈されてきたのかといった考察を深めるため、『妙法蓮華経玄義要文』及び『妙法蓮華経玄義卷釋』といった未見の経疏を通じ、中近世で見られた慈悲観、縁起観の一端を探っていくことを目的とした。

(代表者：濱田 智宏)

#### 『妙法蓮華経玄義要文』

本書は、著者、書写年代の不明な筆録本であり、全一卷一冊で丁数は26丁で完結されている叡山文庫薬樹院の蔵書である。

最も特徴的な点として挙げられるのは、『法華玄義』の第一上から第十下に至る内容の中の、課題となる箇所を論議の形式を通じて明かしていることである。例えば、仏と衆生の間にかなる結びつきがあるのか、といった点を明かす「感応妙」の項には、十法界において感応を論ずる時に、「どうして感応が起きる数に不同があるのか、何故仏界に他九界の感応があるのか」、との問いに対し、「感応にはその因に上中下や近遠があるために数に不同があり、最下のものから最上のものまで差別して感応のはたらきが起きることになる。例えば地獄の因を持つものにも仏の応同が起こりうるために、仏界にも他の九界のはたらきが備わるのである」、と詳細にその数を含めて答えている。この感応に纏わる数の不同については、天台以後数多くの議論があり、『法華玄義』の注釈書やこれまでの先行研究においても指摘されている点である。しかしながら先行研究には、感応の現象が数多く起こることを天台が指摘しているということが重要であって、実際の数に不同があっても問題は無いと述べられることもあり、その数について明確な議論がされていないことも多

い。その点、本書では詳細にその数を求め、その数に相応する現象についても指摘していることなどから、天台の論を明確に受け継ごうとする姿勢をも窺い知ることができる。

#### 『妙法蓮華經玄義卷釋』

本書もまた薬樹院蔵書、著者及び書写年代が不明であり、全一卷一冊で丁数は15丁の筆録本である。

本書の特徴は、『法華玄義』巻第一上から巻第十下に設定される科門ごとに、その中に説かれる概要をごく端的に示しており、いわば玄義の概説書のような書物であると考えられる。

しかしながら、例えば上記同様「感応妙」の部分について見てみると、『法華玄義』において「感応妙」の構成を四つに分類して説かれている箇所をそのまま引用し、説明を加えるのであるが、その際、衆生と仏の交流を示す為に智慧の思想と連関させている。『法華玄義』本文中の同箇所には、智慧との連関は僅しか述べられておらず、感応を理解するためにこの思想を用いたところに、本書の観点と発想を窺い知ることができる。

また、本書に関して、上記の『玄義要文』と本書は著者が不明であるが、相方の字体が酷似していることが挙げられる。その為、著者自身が本書を『法華玄義』全体の要点を捉えるための概説書として15丁程度の僅かな量に纏め、『玄義要文』において注目すべき点を挙げ、検討を加えるためのものとして扱ったのではないかと推察される。内容や表現において時代の特定といったことにも留意し、今後の参考としていきたい。

#### 『止観猪熊抄』

本書は叡山文庫真如蔵書のものであり、記家文字で書かれる筆録本である。「實地房 猪熊良聖」の草案とされるが、実際の著者や年代については不明である。

この草案者良聖について『国書人名辞典』で見ると、藤原北家藤原道長の子長家を一流の祖とする「御子左」（みこひだり）家系の出身で、日本天台廬山寺流の学僧であり、僧正となった人物であるとされている。没年は未詳であるが、1299年に生まれ、1349年の51歳時点では生存は確認されていることなどから、仮に本書が良聖の生存している期間に草案され、書写されたとすると、凡そ南北朝時代（1330～1393）の中盤頃の書であると考えられる。

本書の構成は巻一から四と巻五から七までに分けられた七巻二冊本であり、丁数は一冊目が全117丁、

二冊目が全130丁である。特徴としては、『摩訶止観』に説かれている科門や内容について、例えば「前代未聞止観事」や「三種止観事」などと詳細に項目分けがなされ、その中の大部分には、項目の二つについて「尋～」と「答～」といったような問答を設定しながら検討を進めている。

一冊目に設定される項目は、『摩訶止観』の全十巻のうち、第一巻から第四巻までに説かれる内容に相当しているのであるが、二冊目に設定される項目は第七巻までで終了している。これは二冊目に、冒頭に載る目次とは別に、中盤に新たな目次が載せられていることから推察すると、巻第八から巻第十の項目について、本書には纏めきれなかった、もしくは三巻目として纏める予定があったなどということが考えられる。この点について『天台宗書籍綜合目録』には、他蔵書にある『止観猪熊抄』は巻第十まで収められていると載せられているので、本書に関してはそのようにみることができる。

本書の内容の一部触れてみると、『摩訶止観』の「起慈悲心」の項目に相応させ、「起慈悲心行者観法」との項目を設定し、慈悲についての天台の見解を基に、一念三千の概念を用いて慈悲の持つ実践的側面にかなる広がりがあるのか、といった点を問答を通じて示している。この箇所は、これまで長きに渡って研究対象となっていることから、未見とされる本書と他の文献とを比較検討し、南北朝時代における慈悲の側面についての考察を重ねていきたいと考えている。

#### (2) 研究内容

天台教判論について、特に天台大師智顛の『大本四教義』における記述を中心とした化法の四教を主な対象として研究を行っている。化法の四教の解釈としては諦観が著した『天台四教儀』（以降、『諦観録』）が主流となっている。注釈書もこの『諦観録』に基づいたものが殆どであるため『大本四教義』の注釈書は殆ど存在しない。今回の調査では『大本四教義』の注釈書と推定される末疏を調査することにより、『大本四教義』に対する中世近世の研究内容を探ることを目的とした。

（宮崎 公宏）

#### 『四教義私抄』

本書は著者不明、書写年代も不明な筆録本である。ただ日付のみ10月26日との記述が確認できる。また、残念ながら本書には破損がみられ、一丁目から九丁目

まで頁が五分の一程度欠損しているため、欠損した部分を読むことが不可能になってしまっている。

本書の構成であるが、『天台宗書籍綜合目録』によると、八巻一冊となっているが、実際は巻一から巻五、巻七から巻八の計七巻を一冊にまとめたものとなっている。この形態になったのは書写された当時では無くかなり後の時代になってからであり、最初は各巻が独立していた可能性もあると推察される。その理由として、

- ①各巻の内題を見てゆくと、「四教義抄」、「四教義巻第〇抄」、「四教義第〇巻抄」、「四教義第〇巻私抄」といった記述がみられ、統一されていない。
- ②巻四と巻五の途中（写真 46, 写真 78）において、注釈文が上部に記述されているが、途中で切られてしまっている。
- ③巻一から巻五、巻七から巻八はそれぞれ独立の通し番号が振ってある。
- ④巻六がこの書には合本されていない。
- ⑤巻七には後に、巻八には頭に書き込みが存在する。
- ⑥巻四、五および巻七、八には独立した内表紙が存在する。

ということが挙げられる。②から、注釈が記入されてから合本されたことは確実であろう。①、⑤から、各巻通して書写したものではなかったと推察できる。また、③、④、⑥まず、巻四と巻五、巻七と巻八が合本され、次に巻一から巻五が合本され、最後に巻七と巻八が合本されたと見るべきであろう。合本された時点ではすでに巻六は存在せず、巻九から巻十二についてもおそらく存在していなかったのではないと思われる。

本書の内容であるが『大本四教義』巻一から巻八までにそれぞれの巻が対応した注釈書である。その注釈方法は、注釈を加える文句を単語から単文程度で引用し、注釈するというものである。後述の『天台四教義猪熊抄』と較べて小項目主義を取っているようで、文の解説とともに「天台山」、「修禪寺」、「智顛禪師」といった語句の解説も多く見られ、より辞書（名目）的な性格が強いものとなっている。項目の数は、巻第一が 87 項目、巻第二が 40 項目、巻第三が 55 項目、巻第四が 77 項目、巻第五が 79 項目、巻第七が 116 項目、巻第八が 79 項目となっている。

### 『天台四教義猪熊抄』

本書は別名『四教義抄』と呼ばれ記家文字による筆録書である。著者は奥書等の記述より台嶺沙門如観であり、著作年代は、嘉暦四年（1329）鎌倉時代の最末期に記された書であることが判る。

本書の構成であるが『大本四教義』12巻にそれぞれの巻を対応させた注釈書である。12巻2冊の構成だったようであるが、『天台書籍綜合目録』には「巻八十二、五巻現存」という記述があり、目録が作成された昭和の時点では散失してしまっていたようである。ただし、妙法院蔵書には今回調査を行った真如蔵本の写しである三巻が存在すると示されている。

実際に叡山文庫に蔵書されているのは巻八から巻十二までの五巻分1冊であった。写真撮影時、表紙の裏打ちとして使用されている紙に「四教義抄第八」冒頭から1頁分、裏表紙の裏打ちとして使用されている紙に「四教義巻第九見聞」から2行程が書かれているのが透けて見えるのを発見することができた。このことから、この本を元に書写が行われたことはほぼ確実であると思われる。妙法院にあると言われる写本はその際に作られたものなのであろう。

本書の内容は『大本四教義』の文を抜き出し解説をつけるという形式になっている。注釈する文はそれぞれ十文字程度から成っており、単語単位では扱っていないようである。注釈されている項目の数は、巻第八が 36 項目、巻第九が 42 項目、巻第十が 31 項目、巻第十一が 23 項目、巻第十二が 18 項目である。

### (3) 研究内容

日本仏教思想史上における浄土教について、鎌倉新仏教が勃興していく中での中古天台の浄土教の展開を探っている。特に記家文字といわれる独特の文字で記された書物を通し、中古天台の浄土系思想について阿弥陀経を中心に研究している。今回の調査では、叡山文庫に所蔵されている、江戸期に記されたであろう『歙浦阿弥陀経要解随聞』を読解し、その中で中古天台の浄土教が江戸期においてどのように解釈されていたのかを明らかにしていきたい。

（坂本 眞観）

### 『歙浦阿弥陀経要解随聞』

本書は『天台宗綜合書籍目録』の子細の通り、著者不明、書写年代も不明な筆録本である。道順蔵の印がある乾坤本末の二巻四冊本である。体裁は綴本で内容は漢字仮名まじりの書き下しで文章が書かれており、それぞれ 60～80 丁前後の写本である。著者成立年代ともに不明であるが、江戸時代以降に、日本天台の学僧が智旭の『阿弥陀経要解』について考察したことについて書かれている。

## ①「歙浦阿弥陀経要解隨聞（乾本）」

内題は「歙浦要解隨聞私考」。漢字とカタカナの書き下し文にて記され、1行に付き27字～35字、1丁に付き9行で書かれ63丁で構成される。内容は、『阿弥陀経要解』の概要説明からはじまり、五重玄義で『阿弥陀経』を釈し、力用による解釈までが「歙浦阿弥陀経要解隨聞（乾本）」の全内容である。法界を中心に『阿弥陀経要解』大正蔵37巻363頁c段17～365頁b段2までの内容を句解していく。

## ②「歙浦阿弥陀経要解隨聞（乾末）」

内題は「歙浦要解乾末」とある。漢字とカタカナの書き下し文にて記され、1行に付き28字～36字、1丁に付き9行で書かれ83丁で構成される。内容は、『阿弥陀経要解』による『阿弥陀経』の教相についてははじまり、『阿弥陀経』を序分・正宗分・流通分の三段に分ける所までが「歙浦阿弥陀経要解隨聞（乾末）」の全内容である。四土を中心に『阿弥陀経要解』大正蔵37巻365頁b段3～367頁b2までの内容を句解していく。

## ③「歙浦阿弥陀経要解隨聞（坤本）」

内題は「歙浦要解隨聞坤本」とある。漢字とカタカナの書き下し文にて記され、1行に付き28字～36字、1丁に付き9行で書かれ62丁で構成される。内容は『阿弥陀経要解』による『阿弥陀経』の序文についてからはじまり、一生補処についてまでが「歙浦阿弥陀経要解隨聞（坤本）」の全内容である。極楽の様相を中心に『阿弥陀経要解』大正蔵37巻367頁b2～371頁a14までの内容を句解している。

## ④「歙浦阿弥陀経要解隨聞（坤末）」

内題は「歙浦要解隨聞坤末」。漢字とカタカナの書き下し文にて記され、1行に付き26字～36字、1丁に付き9行で書かれ71丁で構成される。

内容は『阿弥陀経要解』による勤立行についてははじまり、『阿弥陀経要解』の後序までが「歙浦阿弥陀経要解隨聞（坤末）」の全内容である。往生を中心に『阿弥陀経要解』大正蔵37巻371頁a14～375頁a7までの内容を句解している。以上のことから、中古天台では称名を通じていかに往生できるのかということが中心であったが、時代が下るにつれ往生するために、いかに称名が大切であるかということに重きを置かれ、日本天台が浄土教思想を「理」より「事」に重きをおいて展開していったことが読み取れた。『歙浦阿弥陀経要解隨聞』は、智旭の浄土思想を中心に知礼や中国の浄土教思想からも影響を多大に受けているようである。それらを解釈する基盤は、源信の浄土教

だけではなく、日本の他宗の祖師からの浄土教思想も盛り込まれている。江戸時代の文献から、中古天台が浄土教をどのように受容したかの軌跡を垣間見ることができると、今回の調査によって確信することができたので、引き続き江戸時代の日本天台の浄土教に関する書物の調査研究を続けていきたい。

## ④ 研究の課題と発展

今調査により、様々な観点による解釈や緻密な校訂の書物などを撮影することができ、多くの意義ある結果を得た。それらをそれぞれ今後の研究に生かしていきたい。しかしながら、撮影した書物の中には写本のもの、記家文字で書かれたものなどが含まれており、今報告書提出までの期間に十分に検討、研究を進められなかったものもある。これらの書物については引き続き読解、研究を行っていく予定であり、中近世における仏教思想やその変遷を探っていく上で、後々意義あるものとなることを期待している。

叡山文庫には今回調査しきれなかった未見の書物が多く存在するため、引き続き調査を行っていきたくと考えており、さらには、叡山文庫以外の天台に関連する書物を有する寺院機関との連携連絡を計ることで、未見の書物についての更なる調査研究を重ねていきたいとも考えている。

## ⑤ 本研究と予定する博士論文との関連

代表者はこれまで「中国仏教における慈悲と縁起」との研究課題の下、天台大師智顛の説いた『法華玄義』、『法華文句』、『摩訶止観』のいわゆる天台三大部に、慈悲、縁起といった思想哲学がどのようなはたらきや連関を有しているのかといった点を中心に研究を重ねてきた。三大部は天台大師智顛の実践的な宗教体験に基づいた、整然とした理論体系と組織を持つものである。そのうち『法華玄義』には、実相を五つの観点から考察する「五重玄義」の一々の項目を全仏教と関係づけて論じた五重各説が説かれており、さらにその中の「十妙」として説かれる部分には、十二因縁説や四諦などの縁起の観点より実相を考察する境妙や、衆生と仏の関係を慈悲のあり方を用いて考察する感応妙など、これら思想哲学について天台の見解が示されている箇所が多く見受けられる。その為、この十妙に述べられる箇所をきっかけとして、慈悲と縁起の思想哲学の総合的解析を課程博士論文において論考していきたいと考えている。

また、共同研究として分担者の検討した『四教義』

『三観義』などの末疏に説かれる天台思想や、『阿弥陀経見聞』に関する末疏に見られる天台浄土思想なども今後の参考にし、研究を進めていきたい。研究分担者の研究成果は、それぞれの課程博士論文に繋がるものである。

最後に、今調査研究にあたり、比叡山延暦寺執行を始め叡山事務局、叡山文庫にはご高配を賜り、また谷中天王寺様には実習の場とその機会を賜りましたこと

を御礼申し上げます。また大正大学教授多田孝文先生には、昨年度に引き続き調査の基礎からご指導頂きましたことをこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

#### 付録

研究成果の中の文献及びそれ以外の文献について、調査時に記録したカードから、紙数の関係上、項目を抜粋して列挙する。

叡山一壽	153 - 600	涅槃疏鈔第一 本末
八卷四冊 (欠2、3巻)	虫食多	
證眞撰 延寶八年 涅槃疏鈔第一本 31丁 涅槃疏鈔第一末 26丁		

叡山一壽	153 - 601	涅槃疏鈔第四 本末
八卷四冊 (欠2、3巻)	虫食多	
證眞撰 延寶八年 涅槃疏鈔第四本 29丁 涅槃疏鈔第四末 21丁		

真如蔵	911 - 4319	止観猪熊抄
七卷二冊	表紙無、内表紙破損	
良聖草案 一卷 40丁、二巻 19丁、三巻 36丁、四巻 22丁		

真如蔵	911 - 4320	止観猪熊抄 (別名 止観聞書 自五之七)
七卷二冊	表紙破損	
良聖草案 五巻 66丁、六巻 39丁、七巻 25丁		

叡山一普	301 - 815	梵網重軽戒相口決 (別名 蘭若界辨)
一卷一冊	虫食有	
全 38丁		

叡山一葉樹院	67 - 358	妙法蓮華経玄義要文
一卷一冊	虫食有、修正有、朱字有	
全 26丁		

叡山一葉樹院	66 - 357	妙法蓮華経玄義卷釋
一卷一冊	虫食有、12丁左訂正有	
全 15丁		

無動寺一顯	942 - 1381	袖中策考文
二卷一冊	上巻の先頭部欠落か？	
袖中策考文上巻 30丁 袖中策考文下巻 23丁 叡獄執行探題前大僧正 豪實 文政十二年己丑春		

無動寺一顯	943 - 1382	伝教大師章疏示処考
一巻一冊	しみ汚れ有り	
全 31丁 可秀撰 安永八年己亥		

無動寺一顯	945 - 1384	伝教大師御夢想靈驗記
一巻一冊	虫食、修復有	
全 19丁 眞超撰 文政四年辛巳年三月中旬三日		

真如蔵	250 - 2093	四教義私抄
七巻一冊	虫食有、補修有	
一巻 19丁、二巻 7丁、三巻 15丁、四巻 21丁、五巻 22丁 七巻 30丁、八巻 22丁		

真如蔵	257B - 2106	天台四教義猪熊抄 (八之十二)
十二巻二冊(欠1~7巻)	虫食多	
全 97丁 如観写 刊写年次 嘉歴四年六月一六日		

真如蔵	257 A - 2107	四教義鈔
十二巻二冊(欠1~6巻)	虫食有	
七巻 12丁、八巻 13丁、九巻 12丁、十巻 14丁 十一巻 11丁、十二巻 16丁		